

『八月の列車』

【007】 精道学園 精道三川台高等学校 総合科学部

頬に汗が滴り落ち、地面に点々と跡を残す。
立秋を過ぎたというのに茹だるような暑さだ。
カンカンカンカンという踏切の音がした。
顔を上げると車輪のオブジェクトが一瞬だけ目に入る。
なぜそこにあるかは、知らないし、気にしたこともない。
突然クラッとしてきて目を閉じた。
すると一段と蒸し暑くなった。
灼けるような熱さだ。

何かと目を開けると、地獄のような景色が広がっていた。
戸惑っていると、後ろから大きな音が聞こえる。
振り返ると何かが迫ってきている。
驚き、少し戸惑いながら横に逃げる。
走っていくものを見て列車だとわかった。
黒煙をなびかせ黒い車体が目の前を通り過ぎる。
通り過ぎざまに乗っているものと目があった。
死んだ魚のような目だった。
何が起きたのか理解ができず、目を擦る。

目の前にはいつもの風景が広がる。
踏切の先にプレートが見えた。

『原爆救援列車運行の地』

「そうか、今日はあの日か。」
ぼそりつつぶやき、私は歩みを進めた。



旅する人
江戸川乱歩賞
2026 出展作品